

「なこやより、信直」

―奥羽大名がみた「唐入」とその影響―

千 葉 一 大

はじめに

文献史料の中でも、書状（消息）は、通常他者を相手にコミュニケーション手段として用いられるだけあって、書き手の赤裸々な感情がむき出しになったり、さまざまな駆け引きが展開されたりもする史料である。書状を題材にした論考というものがいづれも興味深い内容になるのは、結局のところ当事者たちの本音というものを読み解き分析しているからに他ならないからであろう。

本稿のタイトルは「なこやより、信直」とした。近世大名南部家の礎を築いた陸奥国福岡（現岩手県二戸市福岡）城主南部信直が、豊臣秀吉の引き起こした朝鮮出兵（朝鮮侵略）のうち、所謂文祿の役（第一次朝鮮侵略）の時期に、その前線基地となった肥前名護屋（現佐賀県唐津市鎮西町）から出した書状の端裏の差出記載である。信直をはじめとする奥羽大名が国許に書き送った書状は、派兵の実態や名護屋における大名社会の様子、個人の心情を知る貴重な証言となっており、特に、政権・大名との交渉を「日本之つき合」と位置付け、「古本」、即ち、過去の栄光にすぎる在来の領内統治のあり方や家臣団統制のあり方を「すたり

物」とし、新たな時代に対応できず「身上はて」ることに陥らないためにも、そのような姿勢と決別する決意を述べた信直の書状は、朝尾直弘氏や藤木久志氏の論考^②以来、豊臣政権論やその大名編制のあり方を検討するうえでしばしば言及されている。

秀吉による朝鮮出兵については、枚挙にいとまのないほど数多くの研究があり、拙稿がさらに言及することは個別事象についての言及を一つ増し、屋上屋をかけるものであろう。しかしながら、渡海して戦闘行為に及んだ大名のそれはともかく、戦場になった朝鮮半島には赴かなかつたものの、豊臣政権によって軍役動員の対象となり、名護屋に赴いた大名の目からこの問題を捉えたものはさほど多くないように思われる。^④その中においては、南部信直の名護屋参陣について検討を加えることも意味のあることであろう。

本稿においては、信直自身や奥羽の大名たちがこの時期に記した手紙（書状・消息）を中心史料に据え、天下統一後の豊臣秀吉が構想した外征の動きを辿り、巻き込まれた彼らの本音を探る。戦が深刻になるにつれ彼らが書簡に示すことになるただならぬ思いを抱くに至ったのにはいかなる背景があるのか。その本音のなから、肥前名護屋で繰り広げら

れた大名社会の中で信直が見出していった近世大名としての在り方、さらには名護屋参陣が近世大名南部家に与えた影響面に言及したい。

一 奥羽から「唐入」へ

豊臣秀吉は、小田原攻めを終え、会津に向かっていった天正一八年（一五九〇）七月晦日に、富士山麓で方広寺大仏殿用材の伐採に当たっていた四国の大名たちに宛て朱印状を発し、そのなかで「津軽・生更利・外浜迄」のすべての領主に対して妻子の上洛を命じたと伝えている。^⑤「津軽」は青森県西部を指す地域名として現在も用いられる地名である。

「生更利」はおそらく「うそり」と読むのが正解だと思われる。管見においては、史料上にこのような表記は他に出現しないようにも思われるが、同音の「宇曾利」であるならば、中世における青森県下北地方の呼称である。^⑥「外浜」は現在の青森県津軽地方のうち、陸奥湾沿岸の地域を指す。秀吉が、津軽や宇曾利、外浜という地名を挙げて、自らの政策の遂行を語った意味を考えてみたい。

山室恭子氏によって指摘されているように、^⑦秀吉はその書状のなかで自分の政治的な意向というものを象徴的な言葉で巧みに表現し、行動で人々にアピールして引きつける政治的宣伝に長け、人心を掌握する手法を駆使した人物である。秀吉は、政権当初段階から天下統一の到達点として北奥羽という地域を非常に意識し、自分の権力が及ぶべき版図を示すために「出羽・奥州・日の本果迄も」という言葉を政権の節目となるできごとで多用したことも指摘されている。^⑧「日の本」とは、この場合

現在の津軽海峡を挟んだ北海道南・青森県の陸奥湾周辺の地のことを指し、さらに蝦夷島全体も「日の本」に観念的に組み込まれていたと考えられている。「津軽・生更利・外浜迄」は「出羽・奥州・日の本果迄も」という言葉の変奏とみなしてよいだろう。

秀吉がこれらの地名を挙げた早い時期の用例として、天正一一年（一五八三）四月一二日付で毛利輝元や小早川隆景に宛てた秀吉書状がある。秀吉は、毛利氏の勢力圏はともかく、以東においては「津軽・合浦・外浜迄」も自らの武力に敵うものなしと、その威勢を豪語した。「合浦」とは「外浜」と同じ陸奥湾沿岸の地域の一部、現在の青森市周辺を指す。^⑩これが「出羽・奥州・日の本果迄も」や「津軽・生更利・外浜迄」という言葉の先行形であったと思われる。長谷川成一氏はこの文言を秀吉の実感に基づくものではないと論ずるが、^⑪大石直正氏によって、「外浜」や「日の本」の地が当時の中世日本国家の東の境界として認識されていた場所であることが明らかにされ、また「日の本」を勢力範囲としていた安東家が織田政権と通交する際、秀吉が「奏者」・「取次」として関与していたという事実も^⑬考え合わせれば、秀吉には国家の境界領域についての中世の常識ともいえる認識に加えて、安東家との交渉をもつ過程において北奥羽・「日の本」への「土地勘」を有するようにはなっていたのではないか。自らの目標を語るにあたっては、無意識に言葉を用いることはまずありえない。「日の本」という語を用いるにあたってある程度の知識や認識をもち、与えるインパクトを計算した上での使用だったと考えたい。

さらに、天正一三年（一五八五）一〇月二日付で島津義久に宛てたい

わゆる「九州停戦令」と呼ばれる書状⁽¹⁴⁾のなかで、「関東不残奥州果迄被任倫命、天下静謐」という中、九州のみが争うのは過ちだとする理屈で用いるのも、また小田原合戦（天正一八年、一五九〇）の際、例えば真田昌幸・信幸父子宛の卯月一日付朱印状で、「出羽・奥州・日の本果迄も」仕置を固く行わせると表明したのも同じ理屈、同工異曲のものだろう⁽¹⁵⁾。さらに奥羽仕置への出馬を遂げ、検地・刀狩・大名からの人質差出といった政策が実施され、国内統一の総仕上げの順調な進展を伝える中でもこの文言を用いている⁽¹⁷⁾。したがって、先行研究も踏まえると、「出羽・奥州・日の本果迄」とか「津軽・生更利・外浜迄」といった言葉は、秀吉が一過性のものとして用いた文言ではなく、政権による国内統一を目指す豊臣政権の惹句として、権力の大きさや正当性というものを誇示する計算の上で用いた言葉だといえる⁽¹⁸⁾。

一方、天正一四年（一五八六）六月一日付で対馬の大名宗義調に送った書状⁽¹⁹⁾の中でも秀吉は、東は「日下迄」も平定し天下静謐に至っていると自らの勢力の強大さを強調しつつ、九州攻略の後朝鮮に出兵する野心を述べ、征服の暁には褒美に彼の地の国郡を与えるとして、自らに忠節を尽すよう求めている。同一書簡中に、国内統一の到達点とした「日下迄」という文言を示すばかりか、「高麗国へ」の出兵という別の目的も併せて掲げられている。

大陸侵略を秀吉が初めて標榜したのは、岩沢愿彦氏が明らかにした如く、天正一三年九月に家臣一柳末安宛書状⁽²⁰⁾の中で述べたのが最初だとされる⁽²¹⁾。それ以降もイエズス会の宣教師に対して大陸侵攻を語り、九州攻めでは「高麗・南蛮・大唐マテモ切入」という「大篇ノ企」の風聞が立

ち、攻略の後には対馬の宗家に対して高麗国王の出仕要求を言明した⁽²³⁾。さらに九州の諸大名に向けた「唐・南蛮国迄も」というフレーズを、政権の目標として、あるいは支配を正当化する目的で、支配下に置いたのちまでも打ち出していく⁽²⁵⁾。

その論理を振りかざす範囲は、この時点において秀吉の間接的な影響は及ぶものの、直接的な支配下になかった関東・東北に向けても例外ではない。例えば、秀吉の家臣富田一白^{（かすみ）}は、陸奥白河の白川義親に秀吉の意向の伝達とともに送られた天正一六年（一五八八）四月六日付書状⁽²⁶⁾において、昨年の九州攻略において島津義久が降伏したことをもって「誠唐国迄も平均眼前候」と述べ、さらに秀吉によって、関東と陸奥・出羽を対象に領地紛争の決着を秀吉の裁定に委ねるよう命じる「惣無事」が発令されたことを告げ、その趣旨を了解するよう告げている。つまり、地域領主間の停戦を受け入れさせるのに、豊臣政権は「唐国」までも平定が間近だと強大な軍勢力を裏付けに用いているのである。さらに、天正一七年十一月一日付で浅野長吉と富田一白が伊達政宗に送った書状⁽²⁷⁾では、会津を奪取した政宗に対し、秀吉に従属の意思を示していた会津の蘆名義広を攻撃したことを責め、秀吉が会津の件について関与するのは、日本だけではなく「唐国迄も」秀吉の命に従い支配を受けようとする者たちのためだとする主張が展開される。

いわゆる関東・陸奥・出羽への「惣無事」発令、さらに領主の秀吉への従属が、「唐国」まで支配下に収めるという秀吉自身、あるいは政権の野望が存在する中で推し進められていたこと⁽²⁸⁾、また、北日本の近世史研究において見過ごされがちなことであったが、秀吉の天下統一過程に

おける究極の目標として、国内拡張路線の「出羽・奥州・日の本果迄」と、「唐国迄」という対外拡張路線が併存し、奥羽・関東の服属に向け、政権の究極の目標、あるいは秀吉の語る言辞の正当性を主張するため持ち出されていることが明白である。

天正一八年（一五九〇）の小田原合戦の勝利と奥羽大名の参陣、奥羽仕置の実施によって、「生更利」や「津軽・合浦・外浜」の領主である南部信直・津軽為信が服属し、「日本国六十余州嶋々迄一円御存分二帰了」⁽²⁹⁾という状況が現出した。さらに秀吉は蝦夷島に出仕を促し、それに応じて安東家のもとで蝦夷島代官を務めていた蛸崎慶広がその年末に上洛、翌年正月には蛸崎家の蝦夷島支配が事実上認められたという。⁽³⁰⁾秀吉が言明していた「出羽・奥州・日の本迄」の支配が達成された時、彼の目は、並行して提示してきた対外拡張路線＝「唐国迄」に転じたのである。⁽³¹⁾

二 信直、出陣

① 信直の出陣

南部信直が秀吉による「唐人」に動員されることを認識したのは、遅くとも天正一九年九月、領内で発生した九戸一揆を鎮圧した直後のことである。小林清治氏によって紹介された、秀吉側近でその右筆などをつとめた山中長俊宛の同年九月二九日付書状（天理大学附属天理図書館蔵）⁽³²⁾において、信直は秀吉の「唐人」のため自身が「御供」に加わると述べている。信直ばかりではなく、九月二〇日付の佐竹義宣書状や、一

〇月七日付で伊達政宗の重臣に宛てた豊臣家臣の書状⁽³⁴⁾からも、奥羽・関東の大名は来春から始まる朝鮮侵略の軍事動員の対象とされ、九州に出陣することを認識していたことが明白である。一方、奥羽仕置の進展と並行して、豊臣政権では唐人りの準備はすでに急ピッチで進められていた。⁽³⁵⁾その波が奥羽にも及び、さらには九戸一揆終了直後の信直をも巻き込んだということが事実だろう。

秀吉は、同年一二月末に関白職を甥の秀次に譲り、「唐人」に注力することになる。盛岡南部家の文書には、秀次が翌年正月に「唐人」に向け国内体制を整えるために発令した条目が存在し、武士階級以外の農民も人夫として動員することを定め、在陣中に武家やそれに仕える奉公人らの逃亡を禁じ、人足の飯米支給の在り方や、遠国から動員された者について軍役を緩和し来年一〇月に交代すること、夫役動員された百姓の田畑を郷中で耕作すべきことなどを指示している。史料の伝来が正しければ、北奥大名南部家の領国も国内動員体制の中に確実に位置づけられていたことになる。⁽³⁶⁾

奈良興福寺の僧侶多聞院英俊が記した「多聞院日記」同年二月二五日条には、唐人りのため伊達政宗・上杉景勝・徳川家康のほか東北の大名たちがすべて上洛したと記し、伊達政宗も母保春院（義姫）の侍女小少将に宛てた二月二五日付の消息において、同月一三日に上洛したと述べている。⁽³⁸⁾さらに、家康の家臣松平家忠の日記の同年四月七日条には、「殿様京都ヲつくしへ去十七日ニ御出馬之由候、伊達・南部・景勝・^(備川家康)（佐竹義宣）^(筑紫)（上杉）^(政宗)さだけ御手ニつき候由候」とあって、三月一七日に家康の指揮下で、伊達政宗・上杉景勝・佐竹義宣ら東国・北国・奥羽大名と共に、南部信直

も京都から出陣した旨が記されている。⁽³⁹⁾

② 信直留守中の領内支配

信直が名護屋に在陣し国元を不在にする間、その領国の留守はまだ若い嫡子の利正（のちの南部利直）が預かる形になった。後年、国元にいる子息の彦八郎利康に対し、江戸から送られた利直の書状には、一八・一九歳の頃の時期を振り返り、父信直の名護屋在陣中、南部家内のこと
は家臣の小笠原長吉と、政治向きことは重臣の檜山義実と相談しながら行ったが、そのようにしなければすべてに見当がつかず戸惑うものだったと述懐している。若き利直は、信直が国元を留守にした際の領内統治を、南部家中の重臣・家臣たちと共に行ったのである。

信直不在中の領国においては、「城破り」、城下町への家臣およびその妻子集住の徹底、さらに刀狩と、豊臣政権が求めた政策が本格的に実施されたことが知られる。⁽⁴³⁾

「城破り」は、戦国時代以降、不必要な城郭を破壊して、居住する大名家臣の独立領主としての基盤を掘り崩すことを目的に行われたものだが、秀吉の下でも政権の施策として大規模に行われた。その理念として、支配者に対し在地の武士が抵抗するのを防止すること、さらに、支配に必要な城を選ぶ適正配置により大名の領地支配を促進させること、さらに大名家臣とされた地域の小領主たちを妻子と共に大名の城下町へ集住させ、大名に地域権力を集中し家臣団を強化したなどが指摘されている。⁽⁴⁶⁾ 信直に対しても、天正一八年七月二七日付の秀吉朱印状の第四条で、領内諸城破却とそれに伴う家中の城下集住が規定され、また、信直の名護屋在陣中、天正二〇年六月一日付で、南部家の老臣が連署

して領国内の「城破り」実施状況を報告した「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上事」が提出されたとされる。⁽⁴⁸⁾

「城破り」実施に伴い、城下町への家臣・妻子の集住が強制的に進められた。名護屋から発した天正二〇年霜月一五日付書状において、信直は家臣の城下移住が進まないことを指摘し、国元の下ってから処置について話し合いたいと家臣の桜庭光康に語っているが、翌年閏九月三日付で利正が家臣の轟木・台・口内に送った書状では、督促にもかかわらず、妻子を城下に送らなかった彼らを叱責し、二〇日以内の差出を命じている。利正が家臣に対し強腰でいられるのも、強大な軍事力を背景とする政権を後ろ盾に持つ大名権力が、領内支配を強化しつつあり、家臣団をそのもとで統制することが可能になってきたゆえであろう。

刀狩も、天正一八年八月一〇日付秀吉朱印状で、これまで施行されてきた「日本六十余州」と同様、同一六年に発令された「刀狩令」を「出羽・奥州両国」に対しても適用するものとし、百姓の武器・武具類所持が禁じられ、武家と百姓の身分の分離が目指された。⁽⁵²⁾ 刀狩実施は秀吉が奥羽に対してその政策を施行した「奥羽仕置」の主眼目の一つとして、奥州の隅々まで浸透させるべきものだった。⁽⁵⁴⁾ 既出天正二〇年霜月一五日付信直書状では、信直が一戸（現岩手県岩手郡一戸町）で刀狩が行われたことを諒とし、施行に抵抗する者の成敗を命じている。

南部領において、これら豊臣政権による政策方針の徹底は、結局のところ九戸一揆鎮圧後にずれ込んだ。九戸一揆の鎮圧過程において、政権が軍事力を強権発動することにより領主権力を支え、その強大な力が大名の背後にあることを在地の人々も知り得たことにより、大名権力が強

化されたことが大きい。この地ならしを経たうえで、政策の具体的実施は信直不在の時期に、嫡子利正や重臣たちの手に委ねられたのである。⁽⁵⁵⁾

三 「いくさ」の行方

① 緒戦

天正二〇年（一五九二）。二月八日、文禄に改元。四月一二日、小西行長・宗義智らが率いる第一軍が釜山に上陸して、文禄の役がはじまる。釜山を陥落させた第一軍につづいて、第二軍以降も次々と釜山に上陸し、五月初旬には朝鮮国王（宣祖）が逃亡した漢城（現ソウル）を占領する。この時点における最上義光や相馬義胤などの奥羽大名たちの戦局予想は、緒戦の勝利を受けて、秋には国元に帰れるとか、手間なく高麗を手に入れ、来年には国元に戻るだろうなどという楽観的なものだった。⁽⁵⁶⁾

自軍有利の状況下、秀吉は豊臣政権による東アジア世界の席捲、中国中心だったアジア社会の構造を日本（豊臣政権）中心のそれに転換しようとする構想を示し、さらには自身の渡海と明国侵攻を指示するが、徳川家康・前田利家などが渡海延期を強く主張し、実現は先延ばしになっていた。⁽⁵⁷⁾ 加えて五月に入ると、陣容を整えた李舜臣率いる朝鮮水軍が日本水軍を撃破し、七月には釜山周辺の制海権すら失う。さらには天皇の諫止などもあったため、秀吉の渡海は見送られる。南部信直は同年菊月（九月）朔日付の書状で、「高麗渡海などはや／＼やみ候」、「渡海なと可有とおもうましく候」と述べているのはこれを受けてのものだろう。⁽⁵⁸⁾

同年冬、「義兵」と呼ばれる朝鮮民衆の蜂起や、朝鮮を支援する明軍の攻勢で、戦局はさらに厳しくなった。ところが、信直の極月晦日付書状の中では、「高麗もなこや三・四月ハ一着可有候、左候者五・六月ハ可下候」と、高麗の戦況は三月で決着し、五月、六月には国元に戻るこ⁽⁵⁹⁾とができると見通している。これは一月ごろから秀吉の渡海話が再び持ち上がり、「来春」渡海し「一揆原」（「義兵」を指す）を撫切にして鎮圧し、現地で仕置を済ませたのちに帰国するという意向を示しだしたことが背景にある。⁽⁶⁰⁾ 国内の紀州・北国・九州・関東・奥羽と同様に、秀吉の出馬と仕置がセットで言明され、さらに抵抗する「一揆原」を容赦なく弾圧するというような手法は、かつて国内統一過程で見られたものであり、これも朝鮮侵略が国内統一の延長線上にある証といえる。⁽⁶¹⁾ また、翌年正月七日付の信直書状によれば、唐（明）・高麗（朝鮮）における「御無事」が招来した場合には、唐から人質、さらには「御用次第」に貢物が贈られ、「日本之唐」になるとの見立てを示す。また「高麗一円」が日本のものとなり、国王も日本に居住して扶持を与えられる。さらに秀吉が三月に渡海し、信直もその支度中であると述べている。⁽⁶²⁾ 秀吉の「御前備」と位置付けられた奥羽大名の動向は、秀吉の考えや行動に左右され、それらに敏感にならざるを得なかったのである。⁽⁶³⁾

李如松に率いられた明軍が、救援のため文禄元年一二月末に朝鮮に入り、その攻撃によって平壤を占領していた小西行長らは翌年正月に撤退、その後漢城近郊の碧蹄館の戦いで小早川隆景や立花宗茂の軍が明軍を破るものの、その後戦局は膠着、やがて漢城の維持も難しくなった。伊達政宗は「日本しゆ、こと／＼くうちまけ候て、てさき／＼やふれ候

よし」と渡海勢が敗北を重ねていることを国許へ伝えている。⁶⁶⁾

② 動員の意味

秀吉は、その「唐人」を行うにあたり、大名の領知の石高を基準にして兵員数を決定し、各大名に割り付けて動員を実施した（軍役）。三鬼清一郎氏は、朝鮮出兵時の軍役体系が、実際に派兵された西国大名と比べ、近畿より東の地域に領知を持つ大名はそれより軽かったことを明らかにし、その理由を、九州や朝鮮よりも遠いという地理的要件のほか、特定の軍事動員において秀吉はそれぞれの目的に応じて、諸大名の居城地域を考慮した編成を行っている⁶⁷⁾と述べている。南部信直の軍勢の数は史料によってまちまちで、一〇〇人ないし二〇〇人とされている。⁶⁸⁾この人数は、当時の南部家の領知高と考えられる一〇万石から判断すると、高一〇〇石に〇・一人く〇・二人という低い割合での兵員負担になる。⁶⁹⁾【別表】に示したように、その他の奥羽大名も、西日本、例えば九州大名の一〇〇石五人役などに比べれば、軍役負担は著しく軽い。

全国規模で動員した大名の肥前名護屋への進軍や物資の運送が思うようにいかず、秀吉の京都からの出陣は予定より遅れた。しかし、秀吉はそのことも自己宣伝材料として用いる。天正二〇年三月一三日付秀吉朱印状は、「関東・出羽・奥州・日の本まで」の軍勢を悉く出立させたので、人数がつかえて進まないと言明する。⁷⁰⁾秀吉にとって「唐人」の軍事動員は、それが天下統一の延長線上にあることを示す上でも、以前からの標榜通り自らの支配の及ぶ「関東・出羽・奥州・日の本まで」行われることが必要であった。奥羽の大名たちは、奥羽仕置からまだ日が浅く、領内情勢が著しく不安定な段階での参陣が考慮されたともみられるが、も

う一方では、秀吉が彼らを豊臣政権の到達点を示す象徴として動員した側面も考えられ、著しく小人数であることにも納得がいく。

「日の本」から蛸崎慶広が、文禄二年（一五九三）正月名護屋に赴き、秀吉に謁見したこともその意味から注目すべきであろう。秀吉は高麗を攻め従える前触れだと喜び、諸国商人・船乗りのアイヌや松前の住人（和人）に対する不法行為を禁じ、来航船舶からの徴税権や、規定の違反者に対する処罰を行う権利を慶広に付与した。また、家康と会見した際に、慶広が「奥狄」（夷島の果てとされる地域に住んでいたアイヌのことを指すか）が「唐渡」（カラフト）からもたらした「唐衣」^{サランイヌイ}（蝦夷錦）を身につけており、家康の望みでそれを脱ぎ贈呈したという。⁷¹⁾

慶広は秀吉への謁見や家康に対する「唐衣」の贈呈といった、名護屋駐留の大名や衆人の目に触れ口にしたただらうパフォーマンスを通じて、蝦夷島を治める者「狄の島主」であることを強烈に印象づけ、⁷²⁾朱印状の獲得によって、財政基盤を保証され、近世大名としての存立基盤を固めたといえる。一方、慶広のイメージアップは秀吉にとっても好都合で、秀吉が政権当初から呼号し目指してきた「日の本」までの国家包摂が具現化し、「津軽・生更利・外浜」の領主（津軽為信・南部信直）の軍役動員による在陣に加えて、オランカイ（現中国東北部）・韃靼と一続きだと当地の地理認識で思われていた「エソ」の領主にも政権の支配が及んだことを参陣諸大名に明確に示し得たことになり、歓迎すべきものとして位置づけられたに違いない。⁷³⁾

③ 苦悩する大名たち

苦戦する状況のもと、秀吉は講和交渉を有利に運ぶうえで密接な関連

を持つ半島南部の慶尚道・全羅道の確保を至上命題とし、文禄二年二月二七日付朱印状⁽⁷⁴⁾で自らの渡海を再度公表するとともに、前田利家・蒲生氏郷・浅野長吉らに晋州城（現大韓民国慶尚南道晋州市）攻撃を命じた。さらに、三月一〇日付朱印状⁽⁷⁵⁾によって名護屋にとどまっていた東国勢の出陣を命じた。奥羽の領主たちも、伊達政宗が浅野長吉（長政）・幸長父子の部隊に属し、釜山で朝鮮半島南部に軍勢を駐屯させるための築城普請を行い、蒲生氏郷・最上義光・南部信直・安東実季・本堂忠親・大崎義隆・由利五人衆は、前田利家の指揮下におかれる晋州牧使城攻囲軍に編成された。晋州は、朝鮮南部慶尚道から全羅道に通じる要衝の地で、前年一〇月にも日本勢が攻撃したものの撃退されていた。

政宗は渡海を前にして血気盛んなところを見せたが、次に掲げる南部信直の三月一三日付書状は、それと対照的である。

（端裏書）

「 なこやより

うはへ参 信直」

返々九郎方へ委細申下候、先之とかいも、あまり二本いなく候、ふね二のり候者、人を下可申候、高麗へわたりて、人ハ煩出候へハしに申候、上下是をめいわり申候、天道次第二候間、不苦候、けんこ二御座候て、我等下を御まちあるへく候、目出度く当年中二下可申候、以上、

慇人下申候、筑前殿御とも二高らいへわたり申候、正月三助を下申候つる、其後無事され候て、御渡海被成候、若とかいやミ申候ハ、重而人を下可申候、九郎食物用心御させ可然候、某之事少もく

るしからず候間、あまり二あんし被成間敷候、かしく、

三月十三日

信直（花押）

信直は、利家と共に「高らいへ」の渡海が決まったこと、朝鮮に渡海した者が、発病すれば死が待ち、「上下是をめいわり」という状況になっていることを伝え、成り行きを「天道次第」と述べ、「本い」ではない渡海を受け入れようとしている。

実際に渡海した政宗が、戦地の現実に接したうえで、母保春院（義姫）に宛てた消息では、「かうらひて御兵糧かつくつき申候を存候間」という認識が示されるようになった。朝鮮に渡海した軍勢は、限られた船舶による物資輸送、李舜臣率いる朝鮮水軍の活発な活動、食料現地調達の見込みの甘さなどが要因となつて、早い段階から兵糧や軍事物資の補給が困難な状況に陥っていた⁽⁷⁶⁾。また、「此国にては、水のちかい候ゆへ、人々しにうせ候事、中々申おろかにて候」とも言及するように、渡海した軍勢が朝鮮在陣中、環境や寒暖の差が激しい冬の気候に適応できず、身分の上下にかかわらず体調を悪化させ死亡した者が多かった。現に伊達勢でも政宗の重臣桑折政長・原田宗時が罹病し、国元に戻れぬまま死去している⁽⁸¹⁾。毛利輝元・宇喜多秀家・織田秀信・羽柴秀勝の陣中死亡説が風聞として広まったり、大名が領内から徴発した船頭・水主が多数死亡したため徴発による補充が命じられたり、京・奈良の医師が多数徴発され名護屋に送られたりという事態も発生している⁽⁸²⁾。これらの点からみれば、三月一三日付書状において信直の記した「上下是をめいわり」がる状態というのは、決して大げさなものではなく、現地の状況を踏まえた切迫したものだったといえる。

四月一二日付の朱印状で、晋州城を攻囲する軍勢の渡海前に、朝鮮における日本軍の兵糧不足解決のため、船舶確保・兵糧輸送の円滑化を秀吉は求めており、やがて、このような状況の下では、これ以上の軍勢の渡海が不可能と判断されたことから、晋州の攻撃態勢がすでに渡海していた西国大名を中心とするものに変更され、家康・利家をはじめ、北奥羽の大名たちも渡海することはなかった。⁸⁷⁾

秀吉が四月三日付で「但馬国留守居中」宛に発した朱印状では、戦闘が長期に及び、渡海勢や名護屋から逐電する者が現れたため、浦方・港湾、道辻へ人の出入りを監視する番所設置が命じられている。⁸⁸⁾ このような厭戦気分が名護屋在陣の武将たちにまで蔓延していたことを示すのが、五月一八日付の最上義光書状である。⁸⁹⁾ 彼が渡海の有無について蒲生氏郷に尋ねたところ、氏郷は一つ所に日本勢が撤退し、兵糧が欠乏するなかでは軍勢の追加投入はないと見通しを語ったという。義光は、そのようなことならば命のあるうちに今一度国元最上の土を踏み、水を一杯飲みたいと語る。また、徳川家康が唐入りに動員されるとの報を聞いた義光は、懇意な仲の家康のために尽力しようと使いを送ったところ、方針が変更になったためか、家康から自分も義光も命を拾った、いずれ国元に帰って鷹狩をできるのは夢か現かと喜んでいと伝えられたと記している。

同じ書状で義光は、敗戦や秀吉の意に添わなかったことを理由とする、豊後の大友吉統、肥前の波多信時、薩摩の島津忠辰の改易処分（五月一日）にも触れ、明日は我が身と委縮し、頭をそって何処の山奥なりとも逃げ込んででも命を長らえたいと心境を述べ、多くの大名が処分に

よって恐怖の中にあると述べる。秀吉は、大友らを見せしめとして軍陣の引き締めを図ったが、⁹⁰⁾ 義光のこの反応を見ると、肥前名護屋の参陣諸将の間には、秀吉の目論見とは逆に、処罰によるプレッシャーが余計強く働き、厭戦気分を掻き立てることにつながったものと考えられる。

同年五月二五日付の書状で、⁹¹⁾ 信直は、秀吉に朝鮮の実情を伝えるとたちまち取り締まれ、人々が恐れおのきのき、実情を言上するものがないこと、結果「日本大小御前にて物を申す人」がいらない有様だと述べている。名護屋在陣中の奥羽大名は、渡海や戦への恐怖、朝鮮出兵に対する秀吉の対処、大名に対しても露になった専制ぶりに恐怖を感じてしまったようである。信直の気分は彼だけに特有のものではなく、朝鮮侵略に動員された者のなにかには、身分の上下なく存在する感情であったことが明らかである。

四 名護屋陣中の信直

秀吉の「御座所」である名護屋城は総面積が一七万㎡におよび、文禄の役開始前年の一〇月から普請がはじめられたとされる。⁹²⁾ 九州の大名たちに普請を割り当てて、総・石垣造の城で五層七階の天守がそびえたつ本格的な城郭だった。また、名護屋城の周囲には大名の陣屋や城下町が形成されており、同地に赴いた佐竹義宣の家臣平塚滝俊は、国元への書状において「岸へハ皆諸国の大名衆御陣取にて候間、野も山もあく所なく候、（中略）更に更にみねく／＼あく所なく候、御城きわ二ハ御小性衆或ハ五百・六百或ハ千・二千つ、つれられ候人々取つ、けられ候、たにく／＼

ハ皆町にて候」とその様子を述べている。⁹⁴ 現在名護屋では、一三〇か所におよぶ大名の陣屋跡が確認されており、江戸時代に記された記録や絵図などを基礎史料として一々その陣屋の主が比定され（奥羽大名については【別表】を参照のこと）、南部信直や津軽為信、安東実季らの陣屋跡も、それらの史料に基づいて位置が推定されている。⁹⁵ 中でも為信の陣屋とされる遺跡は城の近傍にある。城の近傍に秀吉の小姓・側近の陣屋がおかれていたとする平塚滝俊の書簡の記述が正しければ、為信は彼らと同じ扱いを受けているようにも見える。ただし、陣屋の位置比定に用いられている史料は、後世に記され精査が必要な二次史料であることに注意する必要がある。⁹⁶

奥羽大名にとって、名護屋在陣は、初めて豊臣政権や全国の大名たちと不断に接触する場となった。大名の接触は緊張感を伴っていたように、例えば、徳川家康と前田利家の下僕の水争いが、互いに徒党を組んで対峙するまでに至った折、伊達政宗が双方に使者を送って好を通じつつ、鉄炮隊の筒先は前田方に向けていたことから、利家から「若き者に似やわぬうちまたかうやく」と評されている。⁹⁷ この話を含め、大名同士のせめぎあいや地縁血縁なども絡んだ党派的对立の存在など、繰り広げられる動きの体験が鮮烈なものとなったことはよく知られている。⁹⁸

信直の周辺でも、戦国期に北奥羽で争っていた南部・安東・津軽三家の間に関係修復の動きがあり、南部・津軽両家の間は、徳川家康や前田利家といった豊臣政権の有力者を巻き込んだ動きに発展していったが、信直の「取次」である前田利家が、為信の依頼で仲介の労をとった家康に為信を「表裏仁」（表裏のある人物）と評したのち、話が立ち消えに

なったことが、既出文禄元年二月晦日付の信直書状に記されている。⁹⁹

一方、同じ書状に見える、信直の嗣子利正と蒲生氏郷養女源秀院の間の縁談の成立は、これまであまり注目されていない。信直は豊臣政権下の有力大名、蒲生家との縁組をにわかに信じがたかった様子で、仲介者から縁女についての情報を得ている。信直は、「てつ書」、すなわち起請文を交わした間柄で問題ないが、同様に起請文を交わして融和したにもかかわらずその後関係が悪化した伊達・蒲生両家の例もあるので、話を詰めるよう仲人に要請したと記している。信直が言及する「てつ書」とは、九戸一揆終結後、氏郷から信直に宛て表裏なく付き合うことなどを誓った、天正一九年九月一日付起請文¹⁰⁰が恐らくそれに該当するものである。在陣大名間の交際が深められる中で、戦国の対立を清算し、政権の大名統制の機能強化に結びつく和解や縁組の動きが進められる一方で、豊臣政権下におけるできごとでも、すでに交際上のファクターとして数え上げられるようになっていたのである。

冒頭でも述べたように、文禄二年五月二七日付で信直が娘婿の南部（八戸）直栄に宛てた書状は、信直が豊臣政権に属する大名権力の編成原理を名護屋での「日本之つき合」のなかではっきり悟らされたことを記したものであるとよく知られている。結局のところ、それは政権内において、近世的な権力構造を早期に取り入れた畿内や中部の大名と、政権に最も遅れて入ってきた奥羽大名の地域間格差が生じたことによるところが大きいのだろう。近世的なるものの取り入れ方の遅速の差こそが、信直にこれまでのありようを「古本」・「すたり物」と認識させ、自らの立場を卑下し、遅れたものと認識させてしまった点に違いない。

大名同士の交際は、豊臣政権のもとに属したばかりで物慣れない奥羽大名にとっては非常に困難なものだった。信直が述べる「上衆」(都に近い方面の大名)による遠国大名を嘲弄する体験というのも、背景にはそのような認識のギャップ、地域間の格差、コミュニケーション面の課題が大きく反映しているだろう。例えば、意思疎通一つとっても、信直の書状に見える訛りをそのまま表記したような箇所、津軽為信が開口一番頑固な物言いをして前田家中の者にやり込められたことなど、その困難さとうかがわせる。信直は、肥前名護屋における虚虚实実取り混じった大名間の交流を「日本之つき合」と位置づけ、そこで恥をかけば、家存亡の危機にさらされるという緊張感、プレッシャーに支配されていた。この消息が書かれる直前、大友吉統らの改易処分が下されたことを考えると、信直が余計交際に神経を使わざるを得ない有様が見えてくる。自らが物にしていけないシステムに向き合う焦り、意思疎通の困難さ、強権的な主君の怒りを買う、大名たちのなぶり者になるといいう、失敗したときに起こりうることへの恐怖感こそが、危機をもたらしかねない政権関係者や大名たちとの「大事之つきあい」を極度に制限し、必要最小限のものに止めた理由だろう。

日明間の講和交渉が開始され、さらに朝鮮に駐留する部隊が留まる番城の普請が進み、半島への兵糧の運送などの処置も整う中で、秀吉は八月三日付の北政所宛消息で、月内に朝鮮に対する処置を終え、九月一〇日頃に名護屋を出立、二五、六日頃に大坂に到着するという「かいちん」計画を伝えた。さらに九日には「ひろい」(秀頼)誕生の報をうけて、予定を早め二五日に出立することを伝えている。秀吉が実際に大坂に到

着したのは八月二五日である。秀吉出立と時を合わせて、名護屋在陣の大名も陣を引き払って上洛したことが、八月二九日の家康大坂到着、一〇月三日の秀吉参内に家康・秀忠・秀家・景勝・政宗らが供奉したことから知られる。一二月七日付の信直書状写によれば、「我等先月十六日二下着仕候」と記しており、彼も文禄二年末には帰国していたことが確認できる。

帰国後、信直が家臣江刺重恒に宛てた書状で見せた表白もまた、信直の名護屋体験の延長線上にあるといつてよい。豊臣政権への金山役金納入が完了し、重恒に負担分のうち砂金六匁を返却することが書状の主旨だが、それに添えて「天下何もの山河両領主之物二なく候、不及是非候」と述べ、大名権力は統一政権に制約されたものであることを認識するよう伝え、政権内の有力大名で、南部家とも深いつながりのある前田利家の領地ですら金山に秀吉から奉行を付けられていること、当時名だたる金の産出地だった佐渡・越後・甲斐・信濃でも同様の状態であることを告げ、政権による縛りは自分たちばかりのことではないと論じている。さらに追而書において、役金納入は当然しなければならないことで、下々が何かと申すことであろうが、葛西などの輩の有様を見れば、その点の分別はあるべきだと述べている。重恒が身をもって体験したはずの、奥羽仕置における葛西家没落、さらには葛西一揆の末路の過程を思い起こし、天下人に逆らうことが身の破滅を招くことにつながるのだということを、信直は重恒に伝えているのである。そのような信直の認識は、先に触れた八戸直業に宛てた文禄二年五月二七日付の書状で、九戸政実の末路を例に説き起こしたことが同根といつてよい。豊臣政権では、

侵略にあたつて鉾山の開発や役金収奪を強化したことがすでに指摘されている⁽¹³⁾。そのような状況のもとで大名は、自分の領地にある鉾山のことであつても自分たちの論理が通用できず、また、支配に制限を受けることを当然のこととらえなければならず、家臣に政権の動きに敏感に反応せざるを得ないこと、それが近世における政権構造であると知らしめたのである。名護屋における統一政権や他大名との接触が、大名の思考に変化をもたらし、地域に近世という時代をもたらす契機になつたといつても過言ではないだろう。

おわりに

――肥前名護屋の「記憶」をめぐる――

本稿においては、「唐人」が豊臣政権の奥羽に向けた眼差しの延長線上にあつたことを指摘するとともに、天下統一によって政権に組み込まれた奥羽大名のこの戦における動向について、彼らが書き残した書状をはじめとする諸史料から分析を加えた。名護屋在陣において、政権や大名社会との交流を通じて支配の論理に転換の必要性を抱かせたとは、先行研究において説かれることだが、現実として奥羽大名の気づきが領国支配に生かされたのか、家臣統制において旧来型の由緒や縁故が実力主義にとつてかわつたのか、それとも転換は不完全なものにとどまつたのか。藩政史研究において、これら諸点の検討は存外に不十分なようにも思われる。近世大名家の権力構造のより確かな分析を積み重ねることが必要な課題であらう。

さて、盛岡藩主南部利視の命により藩士伊藤祐清が編んだ元文四年（一七三九）の序をもつ盛岡藩の藩史「南部記録註解⁽¹⁴⁾」では、信直が「文禄三年」名護屋に参陣したとする年代の誤りがみられる。つまり、江戸時代に入ってから、盛岡藩史の上で、信直の名護屋在陣という史実は、できごとがあつたとは認識されるものの、漠然たる記憶に化していたと考えられる。稿の最後に、その後の盛岡藩で肥前名護屋の微かな記憶がどのように語られたか言及しておきたい。

藩政時代、名護屋は、盛岡城の普請許可を得た地として語られ、記憶されるようになった。これも伊藤祐清が著した「祐清私記」の坤の巻に「朝鮮御征罰之時信直公御出陣之事」という一節があり、信直の名護屋参陣が取り上げられている。そのなかで、名護屋在陣中の信直に対し、秀吉から、居城が辺境にあるため新規築城の望みがあると浅野長吉から聞き及んでいるので、望みの通り勝手次第に築城するようにと、不來方（盛岡）への築城を許可されたという。

信直が築城の許可を名護屋で秀吉から得たという一次史料は確認されず、実際に起こつたできごとであるかどうかは明らかではない。ただ、東国・奥羽の大名やその家臣たちが、上方や進軍の沿道でみた聚楽第や名護屋城、宇喜多秀家の岡山城や毛利輝元の広島城、小早川隆景の名島城（現福岡県福岡市東区名島）といった壮大な近世城郭の姿を目撃した時、自らが居住する城館との大きな差異に、驚きは大きかつたと思われる。事実、平塚滝俊が常陸の国許に送つた書状からは、名護屋への道筋にある城、そして名護屋城そのものをみた彼の驚嘆ぶりがうかがえる。朝鮮半島にわたつた伊達政宗が、根拠地となる「倭城」と呼ばれる城の

石垣普請に参加し、信長・秀吉の下で大規模な築城に参加し、また自ら築城することで、石垣を築造する技術が高かった西日本の大名に対抗心をさせているのも、宮武正登氏が指摘するように、近世城郭をもっていない劣等感の裏返しともみることが可能だろう。⁽¹⁵⁾

宮武氏はまた、豊臣政権に従属した大名が、大坂城・聚楽第・名護屋城、さらには伏見城の城普請を分担させられ、また文禄・慶長の役で朝鮮半島に渡海した大名が「倭城」築城に従事させられたこと、また「日本につきあい」の中で情報が交換され、それによって築城の技術を全国の大名たちが習得していったと考察する。⁽¹⁶⁾近世城郭に接し、それが領主の権力のシンボルになりうるとわかった時、彼らが自分の領地における築城を志してもおかしいことはない。室野秀文氏の研究によれば、盛岡城の縄張には秀吉の築いた大坂城内郭の縄張の影響があるという。⁽¹⁷⁾あくまで可能性の問題だが、名護屋とは特定できなくとも、南部家にとっても平塚滝俊のような「近世城郭の衝撃」と呼べるものがあり、政権・大名との交流から刺激を受け、秀吉の城との類似性を持つ盛岡築城の糧になったと考えても不自然ではない。

もう一点指摘しておきたいのは、南部家の家臣たちが江戸時代に入って、自らの家の由緒と「肥前名護屋の記憶」を結び付ける例が存在するということである。例えば「伝疑小録」という編纂物に、信直が閉伊郡に知行のあった織笠盛貞という家臣に対し、豊臣秀次の渡海に併せて出陣するため、郡内の武士たちを率い出陣するよう命じた文書の写とされるものが掲載されている。⁽¹⁸⁾同書には「古文書信直公を除之外ハ本書外に可有之様子にて、紙筆共一人一時に成れる者之如なれとも他日之参考迄

に載侍ぬ」と注記が付されており、書き写され掲載された段階で、他の文書と異なり、信直書状の原文書は存在していなかった模様である。内容的にも、秀次の出陣に伴って南部家が戦備を整えること自体に不審がある。⁽¹⁹⁾系譜によれば、織笠盛貞は、閉伊郡で他の南部家臣たちと争い、文禄四年（一五九五）に改易されたという。織笠家はその後南部家の家臣に復帰するが、恐らくその後系図書上・由緒書提出といった状況などで、内容的にも偽文書とみなしうるこの文書を作成し、系譜上閉伊郡内諸士の統率者と位置付けた過去における先祖の業績を、信直の名護屋出陣という史実と結びつけて作り上げようとした可能性がある。

また江戸時代の盛岡藩主は、参勤交代の出発時、「御首途（御門出）」という行事を行っていた。その恒例行事の由緒を「名護屋参陣」の記憶に求めたのが、屋敷でその行事が行われる重臣桜庭家である。同家の系図によれば、信直が名護屋へ出陣する際、「御首途」としてきな粉餅が献上され、当主の桜庭光康が相伴し、給仕を光康の妻子が務めたといい、これがその後吉例として行事化したとする。⁽²⁰⁾参勤交代の公式な出発儀礼の起源を信直出陣に求めたのは、主従関係の強さを示すと共に、自家で行われる恒例行事の由緒を求めた結果であろう。

以上、南部家中において「肥前名護屋」の記憶が強く語られたり、由緒が「創造」されたりという事実は、信直の朝鮮出兵出陣というものが、南部家やその家臣たちに大きなインパクトとして残ったであろうことを示す。南部家にとっては近世の大名権力の認識と成立の画期として、また家臣たちにしてみれば、朝鮮出兵時に強まった大名権力のなかで主君との強い紐帯が形成される出発点として、強く認識され、後世、盛岡藩

の歴史像を構成するにあたり、その認識が表出したのではなからうか。一方、その表出が必ずしも一次史料によったものではないことも気にかかる。それは南部家における歴史像の構築過程とも密接にかかわる部分であり、その解明が求められる部分であらう。

【後記】 本稿は、二〇一六年五月八日にもりおか歴史文化館で行われた「れきぶん講座 古文書を読む 盛岡藩の史料学」第三回「殿様のホ・ン・ネー名護屋より、南部信直の手紙」における講演原稿をもとに、大幅に改稿したものである。講演の機会を与えていただいたもりおか歴史文化館に感謝申し上げる。

註

- (1) 文禄二年五月二七日付書状（岩手県立博物館編『岩手の古文書』財団法人岩手県文化財振興事業団、一九八九年、一八号文書）。
- (2) 朝尾直弘「豊臣政権論」（『岩波講座日本歴史9 近世Ⅰ』岩波書店、一九六三年）、藤木久志『日本の歴史 第15巻 織田・豊臣政権』（小学館、一九七五年）一九一～一九二頁、同「中世奥羽の終末」（小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』東京大学出版会、一九七八年）。
- (3) 朝鮮出兵について通覧できる主な研究として、池内宏「文禄慶長の役 正編第一」（初版南満州鉄道株式会社、一九一四年、復刊吉川弘文館、一九八七年）、中村栄孝「豊臣秀吉の外征―文禄・慶長の役―」（『日鮮関係史の研究』中、吉川弘文館、一九六九年）、北島万次『日記・記録による日本歴史叢書 近世編四 朝鮮日々記・高麗日記 秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発』（そして、一九八二年）、同「朝鮮侵略」（峰岸

純夫編『古文書の語る日本史 5 戦国・織豊』筑摩書房、一九八九年）、同「豊臣秀吉の朝鮮侵略」（吉川弘文館、一九九五年）、笠谷和比古・黒田慶一「秀吉の野望と誤算―文禄・慶長の役と関ヶ原合戦―」（文英堂、二〇〇〇年）、中野等『戦争の日本史 一六 文禄・慶長の役』（吉川弘文館、二〇〇八年）、北島万次『秀吉の朝鮮侵略と民衆』（岩波書店、二〇一二年）などを挙げることができる。また展覧会図録として、佐賀県名護屋城博物館編集・発行『秀吉と文禄・慶長の役』（初版二〇〇七年、第四版二〇一四年）がある。各論ともなればさらに膨大なものとなる。詳細な文献目録と学説の整理は、六反田豊・田代和生・吉田光男・伊藤幸司・橋本雄・米谷均・北島万次「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」、日韓歴史共同研究委員会編集・発行『第1期日韓歴史共同研究報告書（第2分科会篇）』（二〇〇五年）、および中野等「文禄・慶長の役研究の学説史的検討」、日韓歴史共同研究委員会編集・発行『第2期日韓歴史共同研究報告書（第2分科会篇）』（二〇一〇年）を参照されたい。

(4) 例えば、奥羽大名の動向に言及した論考として、前掲の藤木久志「中世奥羽の終末」のほか、羽下徳彦「肥前名護屋陣と伊達政宗」（『市史せんだい』八、一九九八年）、長谷川成一「奥羽大名の肥前名護屋在陣に関する新史料について―文禄二年五月「習紙二巻」の紹介と若干の考察―」（『年報 市史ひろさき』一〇、二〇〇一年）がある。

(5) 木村高敦編『武徳編年集成』卷之三十九（もりおか歴史文化館蔵）所収。同書は盛岡藩主南部家の旧蔵書である。なお、写本に誤写等のため意味の通じない箇所が見受けられたので、国立公文書館蔵旧昌平坂学問所所蔵本によって対校した。

(6) 「宇曾利郷」（『日本歴史地名大系 第2巻 青森県の地名』平凡社、一九八二年、二三〇～二三二頁）。

(7) 山室恭子『黄金太閤 夢を演じた天下びと』（中公新書一一〇五、中

央公論社、一九九二年。

- (8) 長谷川成一「天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島」(同編『北奥地域史の研究―北からの視点―』名著出版、一九八八年)、菊池勇夫『アイヌ民族と日本人 東アジアの中の蝦夷地』(朝日新聞社、一九九四年)六七～六八頁。

- (9) 「毛利四代実録考証論断」二十三、「萩藩閥閥録」四・毛利伊豆(東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂『大日本史料』第十一編之三、東京帝国大学、一九三〇年、九五三～九五六頁)。

- (10) 小館衷三「津軽地名雑感」(『弘前大学國史研究』八〇、一九八六年)。ちなみに、現在青森市には「合浦公園」という都市公園があるが、このような地域の歴史についての認識を踏まえて、名付けられた名前ということになるのだろう。

- (11) 長谷川、前掲「天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島」。

- (12) 大石直正「外が浜・夷島考」・「えぞ」と「日のもと」(『中世北方の政治と社会』校倉書房、二〇一〇年)。

- (13) 天正五年(一五七七)閏七月一日付安東愛季書状(山本博文・堀新・曾根勇二編『戦国大名の古文書 東日本編』柏書房、二〇一三年、九〇～九二頁)。

- (14) 東京帝国大学文学部史料編纂所編纂『大日本古文書 島津家文書之一』(東京帝国大学、一九四二年、三四四号文書)。

- (15) 信濃史料刊行会編輯兼発行『信濃史料』第十七卷(一九六一年、一三～一四頁)。

- (16) 同類の朱印状には、立花宗茂宛の同年五月二七日付朱印状(竹内理三・監修・田北学編『増補訂正大友史料』二八、田北ユキ、一九六八年、八八頁)などが挙げられる。

- (17) 天正一八年七月晦日付本願寺宛秀吉朱印状(『本願寺文書』三、東京

大学史料編纂所蔵影写本)、同年八月一日付島津義久宛秀吉朱印状(前掲『大日本古文書 島津家文書之一』三五七号文書)。

- (18) この点については、拙稿「豊臣政権と北奥大名南部家」(山本博文・堀新・曾根勇二編『偽りの秀吉像を打ち壊す』柏書房、二〇一三年)でも、若干の指摘をした。

- (19) 武田勝蔵「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣」(『史学』第四卷第三号、一九二五年)所収写真版による。

- (20) 名古屋博物館編『豊臣秀吉文書集 二 天正十二年～天正十三年』(吉川弘文館、二〇一六年)一六四号文書。

- (21) 岩沢愿彦「秀吉の唐入りに関する文書」(『日本歴史』一六三、一九六二年)。

- (22) 一五八六年一〇月二七日付「下関発、バードレ・ルイス・フロイスよりインド管区長バードレ・アレッサンドロ・バリニャノに送りたるもの」(村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『新異国叢書 4 イエズス会日本年報 下』雄松堂書店、一九六九年、一四九～一五〇頁)。

- (23) 「多聞院日記」三十三、天正一五年三月三日条(辻善之助編『多聞院日記』第四卷、三教書院、一九三八年、六八頁)。

- (24) 天正一五年六月一日付豊臣秀吉朱印状(『別本土林証文』東京大学史料編纂所蔵謄写本)、同年六月二五日付豊臣秀吉朱印状(結城市史編さん委員会編『結城市史』第一巻古代・中世資料編、結城市、一九七七年、一七一～一七三頁)。

- (25) 天正一五年一〇月一三日付豊臣秀吉朱印状(久留米市史編さん委員会編『久留米市史』第七巻資料編古代中世、久留米市、一九九二年、六二六頁、同日付秀吉朱印状(日下寛編『豊公遺文』博文館、一九一四年、一六四・一六五頁)、同日付秀吉朱印状写(宮崎県編纂・発行『宮崎県史』史料編中世三、一九九四年、七六五・七六六頁)など。

- (26) 福島県編集・発行『福島県史』第七巻資料編2古代・中世資料（一九六六年）四八〇～四八二頁。
- (27) 会津若松史出版委員会編纂『会津若松史』第八巻史料編Ⅰ（会津若松市、一九六七年）二八一～二八二頁。
- (28) 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、一九八五年）四二～四三頁。
- (29) 「多聞院日記」三十六、天正一八年七月二六日条（前掲『多聞院日記』第四巻、二四八頁）。
- (30) 前掲天正一八年七月晦日付秀吉朱印状、および松前景広「新羅記」（東京大学史料編纂所蔵謄写本）。なお、長谷川、前掲「天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島」、菊池、前掲書六九頁も参照のこと。
- (31) 北島、前掲「朝鮮侵略」、および紙屋敦之『大君外交と東アジア』（吉川弘文館、一九九七年）一一〇頁。
- (32) 書状については、小林清治「九戸合戦―中世糠部郡の終末―」（大石直正監修・青森県六戸町編『北辺の中世史―戸のまちの起源をさぐる―』名著出版、一九九七年）を参照のこと。山中長俊個人については、桑田忠親「豊臣秀吉の右筆と公文書に関する諸問題（上）」（『史学雑誌』第五二巻三号、一九四一年）、斉藤司「豊臣期関東における山中長俊の動向」（『立正史学』六〇、一九八六年）を参照されたい。
- (33) 「和田掃部助為重所蔵文書」（『秋田藩家蔵文書』十六、秋田県公文書館蔵）所収。同年霜月二日付の岩城能化丸（貞隆）書状（『秋田藩家蔵文書（樋口本）』二十八・岩城文書、前同所蔵）には、「唐人之儀」について義宣から伝達があったと記され、佐竹家や与力とみなされる周辺諸大名で出陣準備が進められていたとみられる。
- (34) 屋代景頼宛仙石曾繁書状写（『伊達政宗記録事蹟考記』十二、東京大学史料編纂所蔵）。
- (35) 天正一八年八月の時点で、九州の大名である小西行長・毛利吉成らがすでに来春の「唐人」に備えていた（天正一八年八月二二日付山中長俊書状写、喜連川町史編さん委員会編集『喜連川町史』第二巻資料編2古代・中世、喜連川町、二〇〇一年、一六九号文書）。翌年卯月一三日には、毛利家の家臣に、来年の軍勢渡海用に船二五〇艘の準備と、造船に必要な鉄・碇の調達を命じられている（天正一九年卯月一三日付石川光元書状、兵庫県史編集専門委員会編集『兵庫県史』資料編中世九・古代補遺、兵庫県、一九九七年、三一三頁）。同年八月九日付増田長盛書状（『武江創業録抄写』東京大学史料編纂所蔵）によれば、秀吉がその家督と京に構えた聚楽第を奥羽在陣中の「中納言様」こと秀次に譲って隠居するとともに、来年三月の「唐人」実施と九州・四国の太閤蔵入地から兵糧三〇万石の供出を命じたこと、側衆・小姓衆が出陣を用意していたことが記される。同年八月下旬から九月上旬には、西国大名が「来年三月朔日」に証明が実施されることを把握し準備を進めており、肥前名護屋と壱岐勝本（現長崎県壱岐市）の「御座所」普請も秀吉から黒田長政・小西行長・加藤清正・松浦隆信らに命じられてもいる（天正一九年八月二三日付石田正澄書状（東京帝国大学文科大学史料編纂掛編纂『大日本古文書 相良家文書之二』東京帝国大学、一九一八年、六九九号文書、および同年九月三日付豊臣秀吉朱印状（参謀本部編纂『日本戦史 朝鮮役』文書・補伝、財団法人偕行社、一九二四年、第八号文書）。
- (36) 天正二〇年正月付豊臣秀次朱印状（もりおか歴史文化館蔵）。前近代に盛岡南部家が所蔵したことが明らかな文書の中で、「唐人」に関わる文書はこの一通のみである。
- (37) 前掲『多聞院日記』第四巻、三三七頁。
- (38) 仙台市史編さん委員会編集『仙台市史』資料編11伊達政宗文書2（仙台市、二〇〇三年）九〇八号文書。

(39)「家忠日記」(東京大学史料編纂所蔵写本)六、天正二〇年四月七日条。

三月一七日付の伊達政宗書状(「伊達政宗記録事蹟考記」十七、東京大学史料編纂所蔵)や、政宗の叔父留守政景の卯月九日付書状(宮城県史編纂委員会編纂『宮城県史』三〇・資料篇七、財団法人宮城県史刊行会、一九六五年、五六三頁)からも、政宗が一七日に京都を出立したことが明らかで、「家忠日記」の記述が裏付けられる。また、三月二七日付の最上義光書状(山形県編さん・発行『山形県史』資料編15上古代中世資料1、一九七七年、二五〇～二五一頁)には一七日に京都を出立したことが記されており、奥羽・関東・北国の大名の京都出立は家康の指揮下でなされたと考えられる。

(40)「御当家御記録」(もりおか歴史文化館蔵)八所収、年不詳五月八日付南部利直書状。

(41)小笠原長吉は信直の代に九戸郡新屋村を知行、利直の代に諱字を与えられ、御金預御勘定惣奉行、のち加判役を務めたとされる(「参考諸家系図」卷三十三、もりおか歴史文化館蔵)。

(42)榎山義実(信直の代に「津軽御城代」を務め、慶長六年(一六〇一)に戦功により加増され二〇〇〇石を知行した(「参考諸家系図」卷十、もりおか歴史文化館蔵)。

(43)これらの諸点については、前掲の拙稿「豊臣政権と北奥大名南部家」においても指摘したので、こちらも参照されたい。

(44)天正一一年五月羽柴秀吉消息(東京帝国大学文学部史料編纂所編『豊大関真蹟集』東京帝国大学、一九三八年、六号文書)。

(45)天正一五年一〇月一四日付豊臣秀吉奉行衆運署覚書(東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂『大日本古文書 小早川家文書之一』東京帝国大学、一九二七年、五一三号文書)、同年一〇月二日付豊臣秀吉朱印状(宮崎県著作兼発行『日向古文書集成』一九三八年、一三一～一三三頁)。

(46)藤木、前掲「中世奥羽の終末」、小林清治「信長・秀吉権力の城郭政策」(『秀吉権力の形成 書札・禁制・城郭政策』東京大学出版会、一九九四年)。

(47)もりおか歴史文化館蔵。なお、この朱印状についての考察は、前掲拙稿「豊臣政権と北奥大名南部家」を参照のこと。

(48)「聞老遺事」六(もりおか歴史文化館蔵)所収。ただし本史料は二次史料に引用されているものであり、その内容については、諸本の対校などを先行今後さらに検討することが必要になるだろう。

(49)「国統大年譜」第三四卷(もりおか歴史文化館蔵)所収。

(50)「伝疑小録」古文書部二(もりおか歴史文化館蔵)所収。

(51)刀狩令の文書は複数確認されているが、とりあえず、天正一六年七月付豊臣秀吉朱印状(掟書)(前掲『兵庫県史』資料編中世九・古代補遺、一〇七～一〇八頁)を挙げておく。

(52)天正一八年八月一〇日付定(豊臣秀吉朱印状)(山本博文・堀新・曾根勇二編『豊臣秀吉の古文書』柏書房、二〇一五年、八七号文書)。

(53)奥羽の刀狩りについては、藤木久志『刀狩り―武器を封印した民衆―』(岩波書店、二〇〇五年)九〇～九七頁を参照されたい。

(54)天正一八年八月一八日付豊臣秀吉朱印状(東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂『大日本古文書 吉川家文書之二』東京帝国大学、一九二五年、七四一号文書)。

(55)南部家の場合、後に盛岡藩内で編まれた「柘清私記」、「奥南旧指録」、「聞老遺事」、「篤焉家訓」(いずれももりおか歴史文化館蔵)などの史書には、検地や刀狩などの政策実施について言及がない。一方「城破り」は、史書相互間の参照という事情も手伝っているが、「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上事」を載せたり、何らかの記述をしたりして、地域権力の象徴である城が壊され、統一政権を背後にした強力な近世大

名の権力がそれに取って代わり、その支配を促進させたことが強烈な印象を残し、それが反映したとも考えられる。

- (56) 前掲、天正二〇年三月二八日付最上義光書状、および同年カ六月五日付相馬義胤書状（豊田武・田代脩校訂『史料纂集 相馬文書』続群書類従完成会、一九七九年、一四一号文書）。

- (57) 桑田忠親『太閤書信』（地人書館、一九四三年）二〇三～二〇九頁。

- (58) 「鹿苑日録」三十二・文禄二年裏文書、天正二〇年六月六日付西笑承兌書状（辻善之助編『鹿苑日録』巻二、太平洋社、一九三五年、一三二～一三三頁）、同年六月二〇日付豊臣秀吉書状（前掲『秀吉と文禄・慶長の役』四五頁）。

- (59) 後陽成天皇宸翰（前掲『秀吉と文禄・慶長の役』四五頁）、天正二〇年九月九日付秀吉書状写（前掲『豊臣秀吉の古文書』一〇一号文書）。

- (60) 盛岡市史編纂委員会編纂（田中喜多美執筆）『盛岡市史』第二分冊・中世期（盛岡市役所、一九五一年）二六七・二六八頁。

- (61) 「御当家御記録」肆所収。

- (62) 天正二〇年一月一〇日付豊臣秀吉朱印状（前掲『秀吉と文禄・慶長の役』四七頁）。

- (63) たとえば、奥羽仕置の際に浅野長吉に示した仕置の施行方針である天正一八年八月一二日付秀吉朱印状（東京帝国大学史料編纂掛編纂『大日本古文書 浅野家文書』東京帝国大学、一九〇六年、五九号文書）は「撫切令」として知られ、実際に大崎・葛西一揆の鎮圧にあたった伊達政宗が撫切を行ってもいるが（天正一九年七月一七日付豊臣秀吉朱印状、七月一七日付山中長俊・木下吉隆連署奉書、七月一八日付浅野長継書状、七月二〇日付豊臣秀吉朱印状、七月二八日付伊達政宗書状、東京帝国大学史料編纂掛編纂『大日本古文書 伊達家文書之二』東京帝国大学、一九〇八年、六〇〇～六〇三・六〇七号文書）、政権の方

針を受け入れない抵抗者に対する容赦仮借ない秀吉の方針は、奥羽に限ったものではなく、天正一三年の根来・雑賀一揆の圧伏（天正一三年三月二五日付羽柴秀吉書状、前掲『大日本古文書 小早川家文書之一』二八四号文書）や、「九州自今已後之為見懲」に弾圧された天正一五年の肥後国人一揆（天正一五年二月一〇日付豊臣秀吉朱印状、前同書、四四五号文書）といった国内統一の過程においてもみられるものである。

- (64) 鷲尾順敬『南部家文書』（吉野朝史蹟調査会、一九三九年）一二五号文書。

- (65) 「貞山公治家記録」（東京大学史料編纂所蔵謄写本）附録之三所収、天正二〇年卯月四日付亘理重宗書状写。

- (66) 文禄二年三月一四日付伊達政宗消息（前掲、『仙台市史』資料編11伊達政宗文書2、九三五号文書）。

- (67) 三鬼、前掲「朝鮮役における軍役体系について」。

- (68) 長谷川成一「近世初期北奥大名の領知高について」（『日本歴史』四一七、一九八三年）の考察を参照。

- (69) 天正二〇年三月一三日付宮部長熙・南条元清・荒木重堅・亀井茲矩・垣屋恒総（カ）宛豊臣秀吉朱印状写（鳥取県立公文書館県史編さん室編集『新鳥取県史』資料編古代中世1古文書編下、鳥取県、二〇一五年、五三三頁）など。

- (70) 前掲「新羅記」。

- (71) 朝尾直弘『大系日本の歴史⑧ 天下一統』（小学館、一九九三年）三八六～三八七頁、榎森進『アイヌ民族の歴史』（草風館、二〇〇七年）一五九頁。

- (72) 秀吉所用と伝えられる扇面三国図（前掲『豊臣秀吉の古文書』一一一号文書）には、大陸の「おらんかい」の位置に「エソ」の文字があり、「おらんかい」のうち日本に近接する場所が「エソ」という地理認識が存在

したことがうかがえる。なお朝尾、前掲書三八七頁、および紙屋、前掲書一二〇―一二四頁・一六〇―一六四頁、工藤大輔「夷島における近世大名の創出―蠣崎（松前）慶広と豊臣・徳川政権」（『弘前大学國史研究』一三五、二〇一三年）も参照のこと。

(73) 榎森進氏は、蛸崎慶広の名護屋参陣をめぐる一連の行動が、「関東・出羽・奥羽・日の本迄」をも軍役動員体制に組み込もうとする秀吉の意図が完全に実現されたことを意味したとの認識を示す（榎森、前掲書、一五九頁）。たしかに前掲天正二〇年三月一三日付秀吉朱印状では、「日の本」までも「唐人」の軍役動員対象としたかのようにみえるが、【別表】に示す「唐人」の軍勢人数を記した諸史料を検すると、いずれにも蛸崎慶広の名や軍勢の数は記されていない。本州側の「日の本」地域を領する南部・津軽両家とは異なり、蛸崎家は、「唐人」の軍役動員を割り当てられず、政権の命により軍勢を差し出していないのである。榎森氏に限らず、これまでの言及（例えば、藤木、前掲『日本の歴史 第15巻 織田・豊臣政権』三三三頁、朝尾、前掲『大系日本の歴史⑧ 天下一統』三八七頁など）に見られた、慶広や蝦夷島、アイヌがあたかも豊臣政権の「唐人」軍役動員体制に組み込まれたり、軍役態勢が強行されたりしたかのような認識は避けるべきである。しかし、慶広が政権から想定されていなかった参陣・出仕を果たしたことで、本文にも示したように、当時の「唐人」をめぐる情勢を踏まえ、「エゾ」が政権の支配に組み込まれていることが明示され、秀吉の壮語が実現したものと受け止められたとみられること、また、それを契機として大名としての立場を確立し、「狄の島主」たる立場を周囲に認識させた点、これらには大きな意義が認められるのではないだろうか。なお、当時の地理認識を踏まえ、慶広が帰国して「鎮狄」という役割を担わされたとする工藤大輔氏の見解（前掲「夷島における近世大名の創出―蠣崎（松前）慶広と豊臣・徳川政権」）

は、「唐人」における蛸崎家の役割を考える示唆となる。

(74) 前掲『豊臣秀吉の古文書』一〇六号文書。

(75) 前掲『大日本古文書 浅野家文書』二六三号文書。

(76) 前掲『仙台市史』資料編11伊達政宗文書2、九三五号文書。

(77) もりおが歴史文化館蔵。本史料は、従来「斎藤文書」と称する文書群中に属する一通として知られ、本来は南部家の一門、遠野南部家伝來文書の一部をなす文書である。この文書群の近代に入ってから複雑な伝來経緯は、細井計・菅野文夫・高橋清明「南部利昭氏所蔵『斎藤文書』について」(『岩手史学研究』八三、二〇〇〇年) 所収の菅野氏執筆解題を参照のこと。なお、斎藤文書と遠野南部家文書については、鈴木茂男「文書がはがされた話—南部文書と斎藤文書—」(『古文書研究』六、一九七三年) があり、文書を所有してきた遠野南部家から文書が流出したと思われる近代の状況の一端は、千葉優「原敬と華族—南部家との関係を中心に—」(『弘前大学國史研究』一一五、二〇〇三年) に興味深い記述がある。それらも併せて参照されたい。

(78) 文祿二年七月二日付伊達政宗消息(前掲『仙台市史』資料編11伊達政宗文書2、九四七号文書)。

(79) 天正二〇年七月八日増田長盛・大谷吉継・石田三成連署状案(前掲『秀吉と文祿・慶長の役』五二・五三頁)。なお、奥野高広『信長と秀吉』(至文堂、一九五五年)二〇一―二〇三頁も参照のこと。

(80) 前掲『仙台市史』資料編11伊達政宗文書2、九四七号文書。

(81)「貞山公治家記錄」卷之十八下、文祿二年七月一九・二一日・同下旬條。

(82)『多聞院日記』三十八、天正二〇年一〇月二三日条(前掲『多聞院日記』第四卷、三七三頁)。罹病した毛利輝元には秀吉から医師曲直瀬道三が派遣され、また織田秀信にも医師が遣わされている(九月二四日付秀吉朱印状、前掲『大日本古文書 小早川家文書之一』三八・三三三号文書)。

(83) 文禄二年二月五日付豊臣秀吉朱印状（東京帝国大学文学部史料編纂掛
編纂『大日本古文書 吉川家文書之一』東京帝国大学、一九二五年、七
八三号文書）、同日付豊臣秀吉朱印状（前掲『大日本古文書 島津家文
書之一』三六九号文書）。

(84) 「多聞院日記」三十九、文禄二年二月二六日条（前掲『多聞院日記』
第四卷、三八七頁）。また同年卯月一二日付で在陣諸將に宛てた秀吉の
朱印状では、「下々相煩」状況に際し、「くすし式十人」を派遣する旨を
伝えている（桑田、前掲書、二四九～二五五頁）。

(85) なお、奥野、前掲書一九八～一九九頁、および盛本昌広「豊臣政権の
贈答儀礼と養生」（『史苑』第六〇巻二号、二〇〇〇年）ではこの点につ
いて言及、検討がみられる。

(86) 東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂『大日本古文書 毛利家文書之
三』（東京帝国大学、一九二二年）九二八号文書。

(87) 晋州城は文禄二年六月二九日に落城している（前掲『秀吉と文禄・慶
長の役』五七頁）。

(88) 前掲『兵庫県史』史料編中世九・古代補遺、三三～三四頁。

(89) 前掲『山形県史』資料編15上古代中世史料1、六〇八～六〇九頁。義
光の名護屋在陣については、伊藤清郎『最上義光』（吉川弘文館、二〇
一六年）一一三～一一六頁に若干の言及がある。

(90) 文禄二年五月朔日付豊臣秀吉朱印状（前掲『豊臣秀吉の古文書』一〇
七号文書）。

(91) 鷲尾、前掲書、一二九号文書。

(92) 名護屋城やその城下町、大名陣屋についての論考には、松本豊寿「城
下の大基地の町、名護屋」（『地理学評論』第四五巻三号、一九七三年）、
宮武正登「肥前名護屋城に見る豊臣秀吉の築城観」（『城郭研究室年報（日
本城郭研究センター研究報告）』八、一九九八年）・「巨大軍事基地に集まっ

た人たち―肥前名護屋」（石井進編集協力『ものがたり日本列島に生き
た人たち 2 遺跡・下』岩波書店、二〇〇〇年）・「基地の都市（肥前
名護屋）の空間構成」（大庭康時・佐伯弘次・服部英雄・宮武正登編『港
湾都市と対外交渉―中世都市研究一〇』新人物往来社、二〇〇四年）・「肥
前名護屋城下町の空間構造とその特異性」（『国立歴史民俗博物館研究報
告』第一二七集、二〇〇六年）などがある。また、展覧会図録として、
佐賀県立名護屋城博物館編集・発行『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』
（初版二〇〇九年、第四版二〇一四年）がある。

(93) 前掲『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』五三頁。

(94) 「名護屋陣ヨリ書翰」（東京大学史料編纂所蔵）。

(95) 「肥前名護屋城と津軽氏・南部氏の陣跡」（青森県史編さん考古部会編
集『青森県史』資料編考古4中世・近世、青森県、二〇〇三年、六二〇
～六二五頁）を参照のこと。

(96) なお、絵画史料として注目されてきた「肥前名護屋城図屏風」（佐賀
県立名護屋城博物館蔵）についても、名護屋城や大名陣屋を復元するう
えで依拠することに対し、建築史の分野から、作成年代や写実性に対す
る疑義が提起されている（萩尾諒「肥前名護屋城図屏風の史料の活用に
おける留意点」、『日本建築学会九州支部研究報告』第五三三号・三（計画
系）、二〇一四年）。我々史学研究会の徒が頼ってきた大名陣屋の位置を記
した絵図や文献共々、今後名護屋城やその城下の復元的考察を行う際の
留意事項として考えなければならない点だろう。

(97) 「利家記」（侯爵前田家編輯部『加賀藩史料』第一編、石黒文吉、一九
二九年、四五～四五二頁）。

(98) 岩沢、前掲書、一八四～一八七頁、藤木、前掲「中世奥羽の終末」。

(99) 豊臣政権下における南部・前田両家の関係については、拙稿「南部と
前田」（『青山史学』三五、二〇一七年）に若干述べたので、参照されたい。

(100) 葛西・大崎一揆の際における両者の対立に言及したものであろう。その経緯については、小林清治『奥羽仕置と豊臣政権』（吉川弘文館、二〇〇三年）二八七～三二三頁を参照されたい。

(101) もりおか歴史文化館蔵。

(102) 例えば文禄二年五月二七日付の信直書状にある「はしめぬいつくくに物を申候て」という箇所、「はしめぬ」は恐らく「はしめに」かと考えられる。また写ではあるが、前掲同年五月一七日付最上義光書状の「ふさんかいへ御みかたあつミ」とある箇所、「あつミ」は「あつめ」と考えられる。これらは誤記というよりも発音をそのまま表記したものと思われる。全国各地に残存する古文書に方言が用いられていることはすでに指摘があるが（渡辺澄夫「古文書と方言」、『日本歴史』一五一、一九六一年、福田良輔「方言と古文書」、『国文学 解釈と鑑賞』第三四巻八号、一九六九年、伊木壽一『増訂古文書学』雄山閣出版、一九七六年、二二・二三頁、迫野虔徳「方言資料としての古文書・古記録」、『方言史と日本語史』清文堂出版、二〇一二年）、その文言・表記の研究は言語学・国語学の範疇にあり、今後さらなる検討と成果還元に俟つところ大である。なお、豊臣秀吉文書を題材とする国語学の分野からのアプローチとして、『豊大閣真蹟集』所収文書を材料にした安部美絵「古文書による国語史研究序説―『豊大閣真蹟集』について―」（『文献探究』一二、一九八三年）がある。

(103) 方言に見られる言葉の地域差は古くから強く意識されていた（小椋秀樹「問15 言葉に地域差があるということは、いつ頃から意識されていたのでしょうか。」国立国語研究所ホームページ、新「ことば」シリーズ16「ことばの地域差―方言は今―」http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/shin_kotoba_series/11_19/pages/kotoba16q15/ 二〇一六年一月三十一日閲覧）。

(104) 文禄二年八月六日付豊臣秀吉朱印状写（前掲『大日本古文書 浅野家文書』七〇号文書）。

(105) 桑田、前掲書、二六四～二六五頁。

(106) 文禄二年八月九日付豊臣秀吉自筆消息（前掲『豊臣秀吉の古文書』一二号文書）。

(107) 「言経卿記」（東京大学史料編纂所蔵）十五、文禄二年八月二五日条。

(108) 前掲「家忠日記」六、文禄二年九月一六日条。

(109) 「時慶卿記」文禄二年一〇月三日条（時慶記研究会翻刻・校訂『時慶記』第一巻、浄土真宗本願寺派出版事業局本願寺出版社、二〇〇一年、二四二～二四三頁）。

(110) 「御筆写」（もりおか歴史文化館蔵）所収。

(111) 「系胤譜考」（もりおか歴史文化館蔵）えて、江刺重恒譜所収、一〇月八日付南部信直書状写。

(112) 重恒は、中世に現在の岩手県南から宮城県北にかけて領した葛西家の一族だったが、秀吉の奥羽仕置によって葛西晴信が所領を失ったのち、南部家に召し抱えられ、稗貫郡新堀・和賀郡田瀬村（現岩手県花巻市）・黒沢尻（現同県北上市）の各所あわせて一五〇〇石の知行を得ている（『御当家御記録』参所収、天正一九年九月二五日付南部信直知行宛行状写）。

(113) 朝尾、前掲「豊臣政権論」、井原今朝男「戦国・織豊期の乙名衆と海運・鉱山・地方経営―葛山衆立屋喜兵衛一代記―」（『中世のいくさ・祭り・外国との交わり―農村生活史の側面』校倉書房、一九九九年、二六七～三三六頁）、曾根勇二「朝鮮出兵をめぐる戦争体制と国内支配の実態―浅野長政の動向を中心に―」（『深谷克己・安井三郎・歴史科学協議会編』歴史が動くとき）青木書店、二〇〇一年、一五一～一七六頁）・「秀吉政権による東国支配の側面―文禄年間の「時分柄」について―」（大野瑞男編『史料が語る日本の近世』吉川弘文館、二〇〇二年、七五～九八頁）、

小林清治「文禄三年伊達領金山一揆」(『奥羽仕置の構造―破城・刀狩・検地―』吉川弘文館、二〇〇三年、三一九～三五九頁)。ただし朝尾論文は、前掲『盛岡市史』第二分冊、一八四頁を引き、当該文書を天正一八年(一五九〇)のものとする。

(114) 岩手県立図書館蔵。同書については、拙稿「近世大名南部家が向き合った「歴史」―歴史の捉え方とアーカイブズ政策展開の側面から―」(『弘前大学国史研究』一四〇、二〇一六年)を参照されたい。

(115) 宮武、前掲「肥前名護屋城に見る豊臣秀吉の築城観」。

(116) 同右論文。

(117) 近世城郭のもつ権力の象徴性については、民衆に対する言及を主とするが、横田冬彦「城郭と権威」(『岩波講座 日本通史 第一巻 近世Ⅰ』岩波書店、一九九三年)がある。城によって表される権威の象徴性は、なにも民衆に対するものばかりではなく、支配層内部でも、天下人の居城がその権威の大きさを大名以下の武家階級に示しただろうし、また大名のそれも地域権力の象徴として家臣層や領民に影響力を発揮したであろう。

(118) 室野秀文「盛岡城の構造と特質―内曲輪の縄張りをめぐって―」(『岩手考古学』四、一九九二年)。

(119) 前掲「伝疑小録」古文書部二所収、九月二〇日付南部信直書状写。

(120) 奥羽大名の軍勢は、秀吉の「御前備」(「三」「いくさ」の行方)を参照)であるはずで、さらに秀次が自前の軍勢の陣立を定めた天正二〇年六月付の陣立書写(愛知県史編さん委員会編集『愛知県史』資料編13 織豊3、愛知県、二〇一一年、三一一～三二四頁)にも、当然ながら南部信直の名前は存在しない。

(121) 「系胤譜考」を所収、織笠盛貞譜。

(122) 「系胤譜考」を所収、桜庭光康譜。

(ちば・いちだい 青山学院大学・聖心女子大学非常勤講師)

【別表】名護屋に在陣した奥羽大名

大名	名護屋における陣所地名 ^{*1}	「朝鮮国御進発之人数帳」 ^{*3} による軍勢人数	「秀吉公朝鮮御進発人数之日記」 ^{*4} による軍勢人数	「ちやうせんごく御進発の人数つもり」 ^{*5} による軍勢人数	「道行之次第」 ^{*6} による軍勢人数	「肥前名護屋城旧記」による軍勢人数	「名護屋古城記」による軍勢人数	文禄2年3月10日付豊臣秀吉朱印状 ^{*7} による軍勢人数
蒲生氏郷	白崎	1000	2000	2000	記載なし	3000	3000	1500
伊達政宗	江迎	500	1500	1500	500	1500	1500	不明 ^{*11}
最上義光	記載なし	300	1000	1000	300	500	500 ^{*10}	300
安東実季	小冠尺	120	120	120	記載なし	200	220	134
津軽為信	垣副之内	50	50	50	記載なし	150	150	記載なし
南部信直	池の崎	100	100	100	100 ^{*9}	100	200	100
本堂忠親	記載なし	50	50	50	記載なし	100	100	25
相馬義胤	長田辻 ^{*8}	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし

註

- *1 「肥前名護屋城旧記」(東京大学史料編纂所蔵)。ただし、蒲生・最上・本堂の陣所記載なし。本堂忠親は「本多伊勢守」として見える。
- *2 「名護屋古城記」(『関関録遺漏』五ノ二所収、山口県文書館編集・発行『萩藩関関録遺漏』1971年、306～319頁)。本堂忠親は「本田伊勢守」として見える。ただし、最上・秋田・津軽・南部・本堂・相馬の陣所記載なし。
- *3 「朝鮮国御進発之人数帳」(辛基秀・仲尾宏責任編集『善隣と友好の記録 朝鮮通信使 第1巻 丁未・慶長度 丁巳・元和度 甲子・寛永度』明石書店、1996年、80～83頁)。本堂忠親は「本多伊勢守」として見える。
- *4 伊佐早謙「奥羽編年史料」(市立米沢図書館蔵)五十、文禄元年正月是月条(市立米沢図書館デジタルライブラリー、http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/KE007_view.html、2016年12月5日閲覧)。本堂忠親は「本多伊勢守」として見える。
- *5 「天正記」巻八(国立公文書館蔵)所収。本堂忠親は「本田伊勢」として見える。
- *6 山鹿素行「武家事記」卷第三十一所収(『明治百年史叢書第321巻 武家事記 中巻』原書房、1982年、494～498頁)。
- *7 東京帝国大学文科大学史料編纂掛編纂『大日本古文書 浅野家文書』(東京帝国大学、1906年)466～476頁。本史料のみ本堂忠親は「本堂伊勢守」として見える。
- *8 「名護屋古城記」には「湯蓋」とあり。
- *9 他史料には「南部大膳大夫」とあるが、本史料のみ「南部九郎」とあり。九郎は信直嫡子彦九郎(利正)を指すものか。ただし、利正は国許の留守居で、名護屋に在陣せず。
- *10 他史料に最上義光は「出羽侍従」としてみえるが、刊本「名護屋古城記」には「出雲侍従」とあって、「最上義光」との傍注あり。一応それに従う。
- *11 浅野長政・幸長親子とあわせて4900人。政宗単独の人数は不明。